

アメリカにおける中・高校生を対象とした ペアレンティングプログラムの検討

伊藤葉子

千葉大学教育学部

Parenting Programs for Junior and Senior High School Students in U.S.

ITO Yoko

Faculty of Education, Chiba University

現在、我が国においては、青年期を対象にした親になるための教育の充実が、重要な教育課題である。そこで、この課題検討のための基礎資料として、本論では、欧米におけるペアレンティングプログラムを概観した上で、特に、アメリカの中・高校生を対象にしたプログラムについて調べた。ここでは、教育的効果が実証されているLearning How to Care Curriculumを取り上げ、生徒たちが「幼児とその親の教室の訪問」を企画していく過程で、ケアリングスキルを学んでいく実践内容を明らかにする。

Developing of parenting programs is one of most important tasks in Japanese educational systems. In this research, parenting programs were reviewed and special parenting programs for Junior and Senior High School Students in U.S. were investigated for the sake of gathering fundamental materials. Learning How to Care Curriculum was one of special parenting programs for teens and it was proved to be an effective program. In the process of this program, students experience authentic learning of parenting and caring to others.

キーワード：ペアレンティング (Parenting) プログラム (Program) ケアリング (Caring) 中学生 (Junior High School Students) 高校生 (Senior High School Students)

1 はじめに一本論の目的

近年、少子化対策としての子育て支援の充実が、わが国の社会全体の共通課題となっている。その流れのなかに、親になる前の世代への親になるための教育の強化が位置づけられる。

わが国においては、家庭科の保育学習のなかに、この中・高校生の親になるための教育内容が包括されており、現行の中学・高校の家庭科学習指導要領²⁾においては、「幼児との触れ合いやかかわり方の工夫ができること」「親の役割の重要性について認識」という文言にみられるように、親になるための教育の重要性が提示されているものの、大幅に授業時間数が削減された現状では、十分な指導がおこなわれているとは言えない。

一方、アメリカでは、1998年に発刊された「家族と消費者科学のナショナルスタンダード (National Association of State Administrators for Family and Consumer Sciences³⁾)」のなかの16の学習領域の一つに「親になること (parenting)」が設定されており、その目標は「個人と家族の幸福を高める親になることの役割と責任の価値をみきわめること」とされている。この親になること (以下、ペアレンティングと書き表す) を教育の中で明確に位置づけるという方針は、多様なペアレンティングプログラムの開発と実施において、具体的に展開されている。このさまざまな理論に基づくペアレンティングプ

ログラムは、1980年代から開発され、学校では、目的や実施形態に応じて、プログラムを選んで取り入れていくという形で成果をあげてきている。

わが国においても、ペアレンティングプログラムのように、発達の適時性に基づいて学習を積み重ね、基本的資質を育成していくようなプログラム開発への需要は高まっていくと考える。そこで、本論では、そのための基礎資料として、欧米の青年期を対象としたペアレンティングプログラムについての知見を集約することとする。

2 ペアレンティングプログラムの概観

2-1 親を対象としたプログラム

まず、青年期のペアレンティングプログラムについて述べていく前に、いわゆる親を対象としたプログラムについて概観する。

アメリカにおける親を対象としたプログラムの発達は、この40年間の家族をめぐる劇的な変化に因るところが大きい。その第一は、女性の社会進出による子育て形態の変容である。1999年の調査⁴⁾によると、1歳未満の赤ちゃんを持つ母親の60%、6歳以下の子どもを持つ母親の64%、6～13歳の子どもがいる母親の78%が仕事を持っていた。また、もう一つは離婚率の上昇である。同年の調査によると、27%の子どもが片親に育てられており (23%は母親、4%は父親)、親戚と暮らしている子どもも4%を占めていた。

連絡先著者：伊藤葉子

これらの家族をめぐる変化が子育ての実態の問題状況へとつながり、親を対象としたプログラムの需要に結びついたと捉えられる。

プログラムは大きく二つに分けることができる。全ての家族が手に入れることができる「一般的なプログラム」と、「もし、何らかの支援が介入しない場合、その子どもの発達に問題がおこると考えられる親を対象に絞ったプログラム」である。前者の例として、1981年から取り組まれているPAT (Parents as Teachers) が挙げられる。ミズーリ州やミネソタ州において始まったこのプログラムは、出生から3歳までの子どもの発達を促進するための質の高いペアレンティングの重要性を示したものである⁵⁾。1996年には改訂されて「Born to Learn」という新しいカリキュラムになっている。

また、親としてのスキルの獲得を主目的としたトレーニング教材も数多く開発されてきた。その代表的なものがトーマス・ゴードンによって開発されたPET (Parent Effectiveness Training) で、これはアメリカの最も古いペアレンティングプログラムの一つであり、3時間のトレーニングを1セッションとし、計8セッションから構成されている。我が国にも「親業」として紹介され、関連書籍も多数発刊され、その訓練講座は各地で開催されている⁶⁾。

その他の親としてのスキルを身につけるプログラムの代表格として、アドラーの心理学理論を基礎としたSTEP (Systematic Training for Effective Parenting) が挙げられる。田中によって、わが国にも紹介されており、実際に9週間にわたる学習会を実施し、その学習効果が報告されている⁷⁾。

後者の「もし、何らかの支援が介入しない場合、その子どもの発達に問題がおこると考えられる親を対象に絞ったプログラム」の内容としては、低収入・教育を十分受けていない親を対象としたもの、子どもの虐待の防止を目的としたもの、若者の非行・暴力の防止を目的としたもの、障害をもつ子どもの子育てに関するもの、10代の母親を対象としたもの等がある。

その中で、10代の母親のためのプログラムについては、その大半が、学校の中の特別なコースや十代で妊娠した生徒のための特別な学校のなかに組み入れられているが、その効果については、次の妊娠を遅らせる等の事項に限って認められるという見解も示されている⁸⁾。この中で効果を挙げているプログラムの一つとして、MELD (Minnesota Early Learning Design) という、本来はミネソタ州の全ての親を対象として開発されたプログラムが挙げられる。

イギリスに関しては、これまでのペアレンティング教育を概観した上で、Einzigは、一般的なプログラムも対象を絞ったプログラムも、本質的には、親への期待だけではなく多面的な要因を扱っていると報告している。しかしながら、近年では、全ての親を対象にしたプログラムでも、何らかのリスクを有している親を対象にしたものであっても、結局は親としてのあり方への集約という共通点が見出せるとも述べている。この共通点とは、親役割における信頼性を増進すること、子育てのスキルの重要性や影響力を強調すること、子ども一人一人の個性

や性質を認めていくこと、他の親と関わりあうなかで親自身が自分のペアレンティングを探求していくこと、自分の子育てのなかでその効果を発揮していけるような、それぞれの親なりのペアレンティングを考えていくこと等である。

一方、カナダにおいては、ペアレンティングプログラムの開発は、子育て支援事業の充実と併行して進められてきた。武田はトロント市における子育て支援の実態を詳しく紹介しているが、1997年から同市で実施されている「ヘルシーベイビーズ・ヘルシーチルドレン」は、わが国における4ヶ月健診などでの保健センターや小児科医の指導に類似しているが、家庭のリスク要因のチェックが綿密であることと、必要に応じて多様なペアレンティングプログラムを紹介する点が優れていると述べている⁹⁾。このプログラムの例としては、Nobody's Perfect, When Baby comes home, You make the Difference等が挙げられる。Nobody's Perfectはわが国にも紹介され、テキストが翻訳されている¹⁰⁾。

2-2 青年期(十代)を対象としたプログラム

欧米においては、かなり以前から青年期(十代)を対象としたペアレンティングプログラムも開発されてきている。藤後は、以下の9つのプログラムの内容をまとめている。

- ・FACS (Family and Consumer Sciences)
- ・Roots of Empathy
- ・Child Development, Parenting, and Parent Development
- ・Education for Parenting: Learning How to Care Curriculum
- ・Nurturing Parenting Program
- ・Parents Under Construction
- ・BTIC (The Baby Think It Over Program)
- ・DADS (Dads make a difference)
- ・ECP (Educating Children for Parenting)

この中のRoots of Empathy, Education for Parenting: Learning How to Care Curriculum, Nurturing Parenting Program, Parents Under Construction, ECPは、幼児期も対象になっている。わが国の親になるための教育においては、中・高校生は対象とされているが、その下の年齢からの資質の育成という視点はない。そこで、具体的な実践内容をいくつか表1で紹介することとする。

また、上記の9つのプログラムの中で、Roots of Empathyは、M. Gordonによって開発されたプログラムであり、我が国にも紹介されている。このプログラムでは、ある親子(乳児とその親)がクラスの一員として迎えられ、10ヵ月以上にわたって月に1回教室を訪問し、子どもたちと過ごし、子どもたちは、乳児の要求・成長・発達について学ぶだけでなく、親と乳児との関係を観察することによって、共感を理解することができることが特徴とされている。この特徴は、いわゆる子育てのスキルを早期に獲得することを目指すというよりも、他者に対する共感という視点からの子育ての基本となる資質の発達を促進していく点に集約されると考える。

表1 幼児期・小学生期を対象としたプログラムの実践内容例

| プログラム名 (対象) | 目的・内容 |
|--|---|
| Language Arts : Interviews (幼児・小学生低学年) | 目的：生徒が過去・現在・未来の時間軸を理解する。過去から未来の生活スタイルを比較する。 方法：黒板に過去・現在・未来をいう文字を書き、これらの言葉の意味を説明させる。過去・現在・未来で居住者・家系図の変化を書かせる。意見交換させる。未来に注目し、社会で何が起きるか予測させる。予測について意見交換させる。家族や隣人が変化することを理解させる |
| Science : Animal Growth and Change (幼児・小学生低学年) | 目的：さまざまな動物の成長場面を学ぶ。選んだ種の動物の一生を知る。 方法：さまざまな動物の赤ちゃんの写真を掲示し、名前を言わせる。それぞれ、どのように生まれたのか分類させる。それぞれの動物が生まれた後、必要なものについて説明する。それぞれの動物の成体の写真を掲示し、赤ちゃんとの組み合わせを考えさせる。それぞれの動物がどのように成長するのか、その成長にはどのようなことが必要なのか考えさせる。 |
| Partnering : An experience in caring (小学生) | 目的：より年齢の高い子どもがリードパートナーとして自分より幼い子どもに絵本の読み聞かせをおこなう。リードパートナーは、その活動において、親が子どもにするのと同じように責任を持つことから、ペアレンティングの学習を通してケアリングを学ぶ。 方法：読み聞かせをしてもらう子どもには、あらかじめ、より年齢の高い子どもを知り合う機会を得るためのプログラであることを説明する。リードパートナーとなる子どもには、プログラムの内容や進め方を伝える。読み聞かせの必要性や良い点を理解させる。どのようにしたら、最も効果的な読み聞かせができるのかを考えさせ、その準備をさせる。読み聞かせをおこなった後は、活動の様子について話し合いをして、評価させる。 |

注) Language ArtsとScienceは、ECPのなかの実践内容

PartneringはLearning How to Care Curriculumのなかの実践内容

このような基本的な資質の育成を目指したものとして、Education for Parenting : Learning How to Care Curriculumも同様の目標を掲げている。そこで、次に、このプログラムについて詳しくみていくことによって、青年期を対象としたペアレンティングプログラムへの考察を進めていく

3 Learning How to Care Curriculum

3-1 プログラムの特徴

このLearning How to Care Curriculumは、Dr. Harriet Heathによって開発され、彼女とDr. Dana McDermottで設立された「ケアリングプロジェクト」によって普及が進められている。「ケアリングプロジェクト」は、ペアレンティングだけでなく、「共生」の基盤となるケアリング能力の発達を指標としている。

Heathは、親の養育行動が、状況の詳細な描写・処理方法のブレインストーミング・親の価値観と子どもの要求や感情や個性に基づいたプランの開発・そのプランの実行のあとの効果の評価というプロセスを有していると、それを「ペアレンティングプロセス」を名づけた。1980年代に幼児とその親が訪問するという、青年期(十代)を対象にしたペアレンティングプログラム(現在のECP)に参加した際に、上記のペアレンティングプロセスを単純化したプロセスを、このプログラムに組み込んでいく方法を編みだした。このペアレンティングプロセスとケアリングプロセスを、幼児とその親の訪問のなかに統合したものが、Learning How to Care Curriculumである。

その後、Heathは、Dr. Dana McDermottと共同で、ケアリングプロジェクトという組織を設立したが、彼女らは、このプログラムを用いた活動の目標は、ケアリン

グプロセスを利用することによって学校生活のすべての局面にケアリングを生かしていくことだと主張している。現在までに、改訂が加えられ、シカゴやニューヨーク、アラスカの学校区域、オハイオ州、ニューヨーク州で使われている。

心理相談員や放課後の指導員(わが国では学童保育の指導員にあたる)にも利用されているが、主な利用者は担任である。なお、プログラムの使用にあたっては、有料のトレーニングが必要である。

3-2 プログラムの内容

このプログラムには、生徒の発達段階にあわせて、3つのユニットが用意されている。ユニット1は、生後まもない赤ちゃんとその親の訪問、ユニット2は、はいはいするくらいの赤ちゃんとその親の訪問、ユニット3は、よちよち歩きの幼児とその親の訪問が設定されており、それぞれ、対象児の年齢にあわせた内容の学習が組み込まれている。

また、プログラムの評価のために、以下のような手立てが提示されている。

- ・進行中の活動の記録
- ・教師・親・生徒へのアンケート調査
- ・ケアリングプロセスに関するプログラム実施前後の知識の増減
- ・子どもの発達に関する基本的知識
- ・教師と生徒・活動のビデオ記録

ここでは、ユニット2について、プログラムの内容とその実践の様子を知るために、その目的(表2)、プログラムのなかでの親子(幼児とその親)訪問を企画していくプロセス(表3)、教師と生徒の活動例(表4)を示す。なお、表2~4の資料は、プログラムの開発者であるHeathから直接提供されたものであることを付記

表2 Learning How to Care Curriculumのユニット2の目的

| |
|---|
| <p>このセクションでは、クラスへの親子（幼児とその親）訪問によるペアレンティングの指導方法を述べる。この体験学習はニューヨーク市が定める教育内容に沿ったものである。</p> <p>教室への親子訪問の実施は、生徒たちに親子関係の重要性と親役割の必要性を学ぶ有効な手立てである。生徒たちは、訪問についてのプランを練り、ペアレンティングや他者へのケアリングのプロセスを体験する。また、親子関係や親がどのように子どもの発達を援助するのかを観察し、親に対して、生活がどのように変化し、子どもを養育するためにどんなことが必要なかを尋ねたりする。</p> <p>教師は、少なくとも、これらの体験の一つが、ニューヨーク市の定めるペアレンティング教育課程の終了要件を満たすようにしなければならないが、発展学習として訪問を重ねることにより、以下のような学習を通して、生徒たちの理解は飛躍的に深まると思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続的に幼児の発達を観察し、記録すること ・幼児の発達に伴い、親役割がどのように変化するのかをみること ・コミュニケーションなどの他の問題を議論すること ・時間をかけて、他者へのケアリングに関わる概念やスキルを統合していくこと |
|---|

表3 Learning How to Care Curriculumのユニット2における親子訪問を企画するプロセス

| ペアレンティングプロセス | 親子（幼児とその親）訪問 |
|---|---|
| <p>プラン</p> <p>①描写： 知識や観察や予想を用いて状況を描写する</p> <p>②ブレインストーミング： 状況に対処する多様な方法を考える</p> <p>③決定： 関わる相手の望み・要求・感情・特徴（発達段階や性格パターン）を考慮したうえで最も効果的な方法を決定する</p> | <p>プラン</p> <p>①描写： 幼児がどんなことができるか、親が幼児のためにどのようなことをするのかを予想し、自分たちのクラスの特徴を議論したうえで、状況を描写する</p> <p>②ブレインストーミング： 訪問実施の方法や親子訪問へのクラスとしての準備のための可能な方法を考える</p> <p>③決定： 心地よい訪問や幼児の好奇心の尊重に必要な目標・幼児の探索的要求・感情（たとえば、物をいつもひたたくようにする子どもの場合など）・特徴（たとえば、探索的要求はその年齢特有のものであるなど）に基づいて訪問実施に際しての最も効果的な方法を決定する</p> |
| <p>実施（状況下での実施）</p> | <p>実施（訪問過程での実施）</p> |
| <p>省察</p> <p>予想の正確さとプランの効果についての省察をおこなう</p> | <p>省察</p> <p>幼児はどのようなことができたか、母親は幼児のためにどのようなことをしなければならなかったかなどの視点から予想の正確さについて省察をおこなう。また、生徒たちがみな理解できたか、幼児は安全で楽しんだかなどの視点からのプランの効果についての省察をおこなう</p> |

注) このプログラムでは、左のペアレンティングプロセスを基にして、右側の親子訪問を企画していく

表4 Learning How to Care Curriculumのユニット2での教師と生徒の活動例

| | |
|-------------------------|---|
| <p>ペアレンティングプロセスとの対応</p> | <p>「これから、人間の発達とペアレンティングの関係について学習していきます」とローエル先生は、担任しているクラスの生徒たちに言った。</p> <p>「まず、この学習の初めに、ポーマンさんが9ヶ月の坊やを連れて、私たちのクラスにきてくれます。この訪問でペアレンティングについて、私たちはどんなことを学ぶことができますか？」</p> <p>「9ヶ月の赤ちゃんがどんなことができるのかわかるわ」とベリンダが言った。</p> <p>「その坊やがどんなものにも興味をもつのかも知ることができます」サラも発言した。</p> <p>「もし、そのお母さんが、ここにいたら、赤ちゃんとお母さんがどうやって関わるのか、お母さんが赤ちゃんのために何をするのかをみることができるよ」とテッドが付け加えた。</p> <p>それらの発言にうなずいて、ローエル先生は「小さな子どもは、よくボールで遊んだり、本を読んだりしますが、9ヶ月の赤ちゃんの場合、どんな風にすると思いますか？」と尋ねた。</p> <p>「本を読むには9ヶ月では小さすぎるよ」とトニーが言った。</p> <p>「本を噛むよ、だって、うちの小さい妹は何でも噛むもの」とアイダが加えた。</p> <p>「9ヶ月の子は、本を抱えることができないと思う」とアーサーが予想した。</p> <p>「なかなか良い予想です」と先生がほめた。続けて「そこらへんをみることができるでしょうし、また、赤ちゃんの頭囲や胸囲や身長も測らせてもらえるでしょう。あなたたちも、お医者さんにいくと測ってもらいますけど、それはなぜでしょう？」</p> |
|-------------------------|---|

プラン
状況の描写

みんな困ったようにしていたが、アーサーがとうとう言った。
「それは、僕たちが、ちゃんと（標準的発達曲線に沿って）大きくなっているかみるためです」
「そうですね」と先生が同意した。

そして、「お客さんを招くときに、どんな準備が必要ですか？今まで、このクラスに9ヶ月の幼児がきたことはなかったでしょう？」

「もし、はいはいしたら、本とか紙とかにいたずらするんじゃない？」と誰かが言った。先生は「そうですね、私たちは、この訪問のプランを考えると、坊やがどんなことができるのかを考えなくてはなりませんね。本を噛むのか、本を楽しむのには小さすぎるのか、本を抱えることができないのか。他にはありませんか？」

生徒たちは口々にこたえた。

「おすわりできるか？」

「指を使ってものが食べられるのか？」

「はいはいできるか？」

「歯が生えていて、噛むことができるのか？」

「お母さんのそばにいたがるのか？」

生徒たちがそれ以上の予想ができない様子だったため、先生は言った。

ブレインス
トーミング

「訪問のプランをできるだけ、いろいろな見方から考えてみましょう。みんなどこに座るのか、坊やとお母さんはどこに座ってもらうのがいいのか、みんなはどうやって赤ちゃんに応じてあげるのか。これはブレインストーミングですよ。互いに批判することが目的じゃありません。できるだけ早く、多くのアイデアをだして書いてください」

「クラスの前に座るにはどう？」トミーが発言した。

「でも見えないよ」ベリンダがさえぎった。

「そうじゃないでしょ、コメントはしないで。なるべくたくさんアイデアを出してみましょう、忘れないで」と先生はこれがブレインストーミングであることをもう一度、確認した。

生徒たちは、次々にアイデアを出した。

「椅子をばらばらにおく」

「椅子は丸く置く」

「Uの形はどう？」

「お母さんに坊やを抱っこしてもらい、そうしないと、はいはいして、いろんなものにいたずらするから、それに私たちが彼を見られるから」

「抱っこされてばかりは嫌がるよ、床の上に敷物を敷いて、その上に置くのはどう？」

「さわらないように、物を高いところに上げてしまおうよ」

「抱っこしないほうがいいわね」

「おもちゃを家から持ってくるよ」

「お母さんが居心地がいいように、ロッキングチェアを用意しよう」

決定

生徒たちから、もうアイデアが出ないように思われたので、先生は生徒たちに「とてもたくさんアイデアが出ましたね」とほめた。「それでは、みんなが安全で楽しい訪問にしたいと思ったら、どのアイデアがいいでしょうか？ランディ坊やがどんなことができるのか予想しましたよね。その予想に気をつけて考えてみましょう」

「もし、私たちがUの字に椅子を並べたら、みんなが坊やたちのこと見られるよ」誰かが言うと、他の子もうなずいた。

「それに、坊やが、はいはいしても、教室の他のものにさわったりできないしね」という意見も多くの賛同を得た。

アメスが先生を見ながら言った。「ロッキングチェアを使うのはいい考えだと思うわ。お母さんはロッキングチェアに座ると居心地がいいと思うから。Uの字に椅子を並べたて、前のところに座ってもらえばいいと思うわ」

「妹が使わなくなったおもちゃをいくつか持ってくるね」メリッサが申し出た。「赤ちゃんにはおもちゃが必要なもの」

生徒たちはプランを決定した。

「それでは、本とかボールとかメジャーは誰が持ってきてくれますか？」と先生が尋ねると、生徒たちが、それぞれを自主的に分担した。それから、先生は「ランディは9ヶ月です。私たちは、彼がどんなことができるのか、この用紙に記録しましょう」と発達記録用紙を配った。

実施

訪問の当日、生徒たちは、教室の壁をふさぐような形で机を半円に並べ、メリッサはおもちゃを持ってきた。生徒たちはお母さんと赤ちゃんを囲むようにUの字に座った。

ポーマンさんが部屋の入ってくると、先生がみんなに彼女を紹介した。赤ちゃんを抱っこしながら、ポーマンさんは生徒たちになっこり微笑みかけると、「これがランディよ」といって、大きなバッグから敷物を取り出し、床に広げて敷いた。ランディをその上におろしながら、「たぶん、役に立たないでしょう。ランディは、はいはいして、敷物から出ちゃうでしょうから。きっと、汚くなっちゃうと思うけど、仕方ないわ」

ランディは生徒たちをみると、泣き出し、お母さんのところに戻っていった。お母さんはランディを抱き上げ、「たくさんの人が坊やをみているわね。でも大丈夫よ、みんなお友だちなのよ」と彼をしっかりと抱きしめて、背中をさすりながら言いかけた。それから、ロッキングチェアに座り、ランディを膝のうえに横向きに抱いて座らせた。バッグの中をかき回すと、箱形のおもちゃを取り出し、やさしく話しかけながら、そのおもちゃで遊ぶ手本をみせると、ランディはすぐにそのおもちゃで遊びはじめた。

生徒たちは、ランディがお座りができること・はいはいができること・箱形のおもちゃで遊ぶのが好きなこと・何かこわいことがあるとお母さんのところに戻ることを発達記録用紙に書き込んだ。それから、お母さんがランディのお気に入りのおもちゃを持ってきていること・いつも彼を喜ばせようとしていること・他の活動に入っていこうとする時に手助けをすることも書き留めた。

しばらくして、ランディは生徒たちに注目し始めた。彼は、降りたいという合図らしく、体を揺らしたので、お母さんは彼を床に降ろした。ランディはトミーのほうへ、はいはいしながら近寄り、ほほえみかけ、持っていた鉛筆をつかんだ。

「あらあら、これは、だめよ」とお母さんが、ランディのそばにいて横に座り、「みて、ランディ、とがっているでしょ、いたいいたいよ。」とランディに鉛筆の先をそっとさわらせて、「いたい、いたいよ」と繰り返した。それから、手をそえて、鉛筆の使い方を教えた。ランディは鉛筆をにぎって、なんとか書く動作をやってみたが、その後、口にもっていこうとした。「鉛筆は食べるものじゃないのよ」とお母さんがいってトニーにぬいぐるみを渡して、「ランディはこれが好きなのよ」といって、口にもっていかないように鉛筆を押さえた。

トニーはぬいぐるみをランディの前に差し出したが、ランディはそれを押しやっ、お母さんがとろうとしている鉛筆を握りしめたまま、返そうとはしなかった。そこで、お母さんは、ミニカーを出して、そばの生徒に渡し、「これで遊んで気を引いてみて」といった。このミニカーは、ランディの注意をそらすことができた。お母さんは、ランディから鉛筆をとりあげることができ、生徒たちは、それを見えないところに隠した。

ランディがきょろきょろし始め、ミニカーにあきたように見えたので、ベリンダは本を手渡した。本を手にとって、口にもっていかうとしたので、お母さんがやさしく「これは食べ物じゃないのよ」と話しかけた。手を添えて、本を開くのを手伝ってやり、いろいろな絵を指さして、「これは〇〇でしょ」と説明していった。ランディは本にとっても興味をもったようだった。静かに聞いていた。

ランディはボールに非常に興味を示し、それを口にもっていった。そして、身長や頭囲や胸囲を測るときには、体をくねらせた。

省察

訪問が終了した後、生徒たちは自分たちの予想が正しかったのか、椅子の配置が安全性という点でどうだったのか、振り返ってみた。議論した結果、生徒たちは、Uの形が良かったかどうか確信はもてないという結論に達した。

生徒たちは、ランディが本に興味を示したことに驚いていた。「私の妹が9ヶ月の時には、本をじっとみたりしなかったわ」とアイダが反応した。

先生は鉛筆に関するエピソードに話を進めた。「ランディのお母さんはどうしましたか？」

生徒たちは、「鉛筆の先がとんがっていることを教えて、こう使うのよって教えてた」と思い出して言った。

先生は尋ねた。「ランディが鉛筆に興味をもった時に、たとえば、他にどんな対処法が考えられますか？」

生徒たちは、ランディから鉛筆をとりあげたり、さわっちゃだめと手をたたいたり、無視したりなどさまざまな対処法を挙げた。

「なぜ、あの時、お母さんはあのような行動をとったのだと思いますか？もしお母さんがただ『だめよ』と言ったり、手を叩いたり、鉛筆をもったままで何もしなかったりしていたら、どんな結果になっていたでしょう？たぶん、ランディの探索しようとする気持ちは弱くなったり、なくなってしまうたりしたのではないかしら」と先生が続けた。生徒たちも「それに、もし、ボウマンさんが何もしなかったら、ランディは鉛筆でけがしていたよ」という意見で一致した。

生徒たちは、最後に、この訪問についてノートに書き留めた。

する¹¹⁾。

4 結びにかえて

Heathは、プログラムについて「ペアレンティングプログラムは、ほかの誰かのために感じたり、考えたり、行動したりする能力を育てることによって、ケアリングスキルを育てていく。このスキルは、親子関係だけではなく、クラス経営や生徒同士の関係、生徒と教師の関係を促進させるスキルとなる」と述べている。

このケアリングという概念は、人間の発達を関係性という視点からみていくために重要な示唆を与えてくれる概念だと考える。また、ここでいうスキルとは、単なる技能ではなく、現実的な生活をつくっていきける力として、人間の基本的な資質につながるものだと捉えられる。

我が国においても、上記のような視点からの教育実践がすでに導入されており、その成果も報告されるようになってきている。ケアリングスキルという概念自体が、そこに在る人間同士の間での営みであることは、その育成が文化や社会の在り様と密接に関わっているということに他ならない。それ故に、我が国における親になるための教育は、我が国独自の家庭・地域・社会のなかに位置づけて捉える必要があるだろう。実際に、本論のなかで紹介した内容は、我が国においてそれほど目新しいものではなく、さまざまな教科で似たような実践も試みられている。

ただし、これらのプログラムから得られた知見のなかで、我が国の教育の捉え直しにつながることは、人間の基本的な資質を、発達段階にあわせて育成することをカリキュラムとして位置づけていくことだと考える。言うまでもなく、その重要性については周知のことであり、学習指導要領でも発達段階の適時性が慎重に配慮されてきたが、現実には教科間の断片化やあるいは重複化、小学校と中学校、または中学校と高校の間の分断化が問題となっている。その意味において、これらをつなぐ指標として、教育プログラムを有効活用していくことも考えていく必要がある。

参考文献

- Smith, C., Perou, R. and Lesesne, C., (2002) Parent Education, In Bornatein, M.H. (Ed.), Handbook of Parenting vol. 4 (pp. 389-410), London : Lawrence Erlbaum Association.
- Cooper, C.L., Chevrier, S.G., Schiffer, J. and Schuver, A., (2002), Preparing Tomorrow's parents Today, The parenting project, (<http://parentingprojecst.org>)

引用文献

- 1) 文部省. (1998). 中学校学習指導要領平成10年告示
- 2) 文部省. (1999). 高等学校学習指導要領平成11年告示
- 3) National Association of State Administrators for Family and Consumer Sciences Education・V-TECS. (1998). NATIONAL STANDARD for Family and Consumer Sciences.
- 4) Children's Defense Fund. (1999). The state of America's children. (1999, Yearbook). Washington, DC.
- 5) Winter, M., and Rouse, J.M. (1991). Parent as teachers : Nurturing literacy in the very young. *Zero to Three*, 12, 80-83.
- 6) トマス・ゴードン. (1998). 近藤千恵訳. 親業 (PET). 大和書房
- 7) 田中マユミ. (1987). 親教育STEPに関する基礎的研究. 女性文化研究所紀要. 2. 29-46
- 8) Pew Charitable Trust. (1996). See how we grow : A report on the status of parenting education in the U.S. Philadelphia, PA: Author.
- 9) 武田信子. (2002). 社会で子どもを育てる. 平凡社新書
- 10) ジャニス・ウッド・キャタノ. 三沢直子監修・幾島幸子訳. (2003) 完璧な親なんていない!. ひとなる書房
- 11) Copyright Harriet Heath, Ph. D. (2001). Adapted from the *Education for Parenting : Learning How to Care*.